巻頭言

亜細亜大学大学院 アジア・国際経営戦略研究科 委員長
林　　聖子

2019年末から世界で感染が始まった新型コロナウイルス感染症の各国における状況は様々で、中国では感染が急拡大し、わが国において行動制限はかなり緩和されてきたが、厳しい感染状況が続いている。ウクライナとロシアの戦争は長引き、一刻も早い平和的終結が望まれる。このような中で各種要因により、世界で半導体不足が生じる等、グローバルな社会経済への影響は大きい。

このように厳しい状況下ではあるが、亜細亜大学では2022年度から学部教育は大学構内での対面授業に戻り、大学院教育は柔軟にオンラインによるコミュニケーションを取り入れたハイブリッド授業となった。留学生が多く在籍する大学院アジア・国際経営戦略研究科では対面授業の教育効果を鑑み、1/3 以上を対面授業とし、研究指導（ゼミ）は概ね対面授業を実施している。対面授業に戻ったキャンパスには、学生の明るくはじけるような元気な姿と、にぎやかな声が戻ってきた。

当研究科開設以来14年間実施してきた約２週間にわたる中国現地研修は、コロナ禍のため2020年度、2021年度に続き、2022年度も中止となり、昨年同様にアジア・中国ビジネスの実務に精通された上海・香港・バンコク・東京在勤の講師陣の協力を得て、オンラインでのトップマネジメント特別講義を開講し、代替えとした。コロナ禍のため、学生が工場見学等を通して、自分の目でビジネス現場を知る機会は難しい状況であるが、各授業や中国現地研修代替のトップマネジメント特別講義等を通して、学生がアジアの多様なビジネス等を学び、産業や企業を分析し、各視点で考察する機会を設けている。

アジア・国際経営戦略研究科では、学生が修了後、変化著しい社会経済の中で、柔軟なものの見方や考え方ができ、全体を俯瞰しながらも適時適切な戦略の立案、それらを実践できる力等、ビジネス界で求められる各種スキルを備えた人材育成を目指し、教育に取り組んでいる。

今回、アジア・国際経営戦略研究論集第16号を発行の運びとなり、当研究科博士後期課程の学生１名からの投稿論文と、2021年度博士前期課程修了学生の

修士学位論文３件の計４件を収録している。

投稿論文１件は、巻末の規程に則り、研究科委員により審査された論文で、劉暁氏による「人的ネットワーク活用による企業の海外進出に関する一考――綜研化学の中国進出を事例に――」である。この投稿論文は、人的ネットワークにより中国進出が実現できた綜研化学の事例を詳述して分析し、仮説１：「ネットワーク志向が強い企業家・経営者であるほど、海外進出の成功率が高くなる」と、仮説２：「人的ネットワークの構成員が多様性に富むほど、海外ビジネスの成功率は高くなる」を実証している。

修士学位論文３件のうち、１件目はJI RUHUA氏（2022年３月修了）の「若手従業員のワーク・エンゲイジメント向上に関する研究」である。２件目はREN YANLIN氏（2022年３月修了）による「日中企業間の連携によるイノベーション創出に関する研究」である。３件目はYIN WENJIE氏（2021年９月修了）による「シェアリングエコノミーの特質に関する研究――中国・日本における発展状況とその展望の比較を中心として――」である。本号に掲載したこれらの修士学位論文は、本号発行の前年度（2021年度）に修了した修士学生が執筆した論文のうち、アジア・国際経営戦略研究科研究科委員会において優秀であると評価された３つの論考である。

コロナ禍等厳しい状況が続く中で、本研究論集がアジア・国際経営戦略研究科在籍学生及び修了生の研究成果を投稿できるジャーナルとして、彼らの研究力向上やビジネスの現場での活用等の一助となることを祈念している。

以上